

児童期における友人からの受容と自尊感情の関連

関 真伍・堀井 俊章

Relationship between acceptance from friends and self-esteem in childhood
Shingo SEKI and Toshiaki HORII

問 題

自尊感情

自尊感情とは self-esteem の訳語である。中間 (2016)、山崎 (2017) によれば、アメリカのローゼンバーグ (Rosenberg, 1965) は自尊感情の在り方を “very good” と “good enough” の 2 つに区別した。そのうち “very good” は他者からの優越という意味合いが含まれ, “good enough” は今の自分に対し素朴に好意をもち, 受容するという意味合いが示される。ローゼンバーグは “good enough” の感覚が健全な自己形成にとって望ましい自尊感情であると定義した。“good enough” の感覚は, 自己受容の感覚に近いものであるとされる (中間, 2016; 桜井, 2000)。すなわち, ローゼンバーグの定義した自尊感情は, 自己を素朴に受容することに重きを置いたものであったといえる。本研究では, ローゼンバーグの定義をもとに自尊感情を扱うこととする。

近年は, 自尊感情を状況との関連で捉える研究に関心が向けられており, 状況によって変化する状態自尊感情は, 他者から受容もしくは拒否されているといった感覚との関連が見られることが報告されている (阿部・今野, 2007)。

小学校高学年の自尊感情

児童期に, 自尊感情は本格的に他者との関わりの中で育まれるようになる (荻野, 2012)。また, 小学校高学年は特に友人の影響を大きく受ける時期である (長谷川, 2014; 臼倉・濱口, 2015) とされるように, 児童の学校生活において, 友人関係は重要な要素であると考えられる。

小学校高学年は, 児童を取り巻く友人関係が大きく変動する時期である。Sullivan (1953 中井・山口訳, 1976) によれば, 小学校高学年においては chumship と呼ばれる同性同年輩との親密な友人関係が形成される。さらに小学校高学年の児童の友人関係には, 親密かつ排他性の高い仲間集団をつくるという特徴が存在するとされる (保坂, 1998; 松本, 2016)。なお, 女子は男子よりも親密な友人関係を形成する傾向が強いとされる (須藤, 2003)。このことについては, 女子は男子よりも仲間集団から拒否されることに敏感であり, 仲間集団から逸脱しないように気を遣っているとの知見 (黒川・三島・吉田, 2006) が存在する。また, 男子の友人関係が小集団化するの女子よりもやや遅く, 男子は女子よりも広い友人関係を形成するとされる (井上, 1992)。

特定の友人と親密な友人関係を築くことは, その後における親密な人間関係の備えとなるとの報告 (Sullivan, 1953 中井・山口訳, 1976) や, 適応や精神的健康の支えとなるとの報告 (岡田, 2008), 学校での満足度を高めるとの報告 (朝日・青木, 2010),

子どもの発達において必要なプロセスであるとの見方（保坂，1998）がされている。しかしその一方で，仲間集団以外の学級成員と関わりをもたなくなること（黒川他，2006），親しい友人間で特徴的に発生するいじめが存在すること（三島，2003，2008）などの問題点も報告されている。

被受容感とソシオメーター理論

「他人から受容される感覚」と定義される被受容感は，自尊感情に関係する概念の1つとされる（杉山，2002）。Leary, Tambor, Terdal, and Downs（1995）や Leary（2011）は，自尊感情と被受容感の関係について，ソシオメーター理論を提唱している。ソシオメーター理論に基づくと，自尊感情は自分自身が周囲の他者からどれだけ受け入れられているか，自分自身の社会的立場や対人関係を評価するシステムである。すなわち，ソシオメーター理論とは自尊感情を形成する要因は被受容感にあるとした理論であり，自分が周囲の他者に受け入れられていると感じている場合，自尊感情は高くなるといえる。このことを実証的に検討した研究として，岡田（2011）は高校生および大学生の被受容感が自尊感情に正の関係を示すことを報告している。以上のことから，自尊感情には周囲の人間との関係を査定する機能があると考えられる。

児童期は他律的な判断基準をもつもの（伊藤，1991）とされることから，児童期の自尊感情の形成には，特に他者からの影響が大きいと考えられる。また，小学校高学年は特に友人の影響を大きく受ける時期であり（長谷川，2014；臼倉・濱口，2015），児童は仲間から受け入れられることによって自己価値の感覚を高めることができる（井上，1992）とされている。すなわち，児童における友人との関係と自尊感情の間には強い関係があることが推測される。

自己表現

人が集団の中で良好な関係を維持するためには，集団において適応的な特性をもった人間であるというように振る舞うことが重要になる（岡田，2007）とされるが，「行き過ぎた適応」は「過剰適応」と定義され（石津・安保，2008），個人にとって適応的に作用する場合がある一方で，個人の心身の健康に悪影響を与える可能性があることが報告されている（石津・安保，2008，2013）。

過剰適応には，他者に配慮することや，人からよく思われたい欲求などの側面が確認されている。このような他者志向的な適応方略だけでなく，自分の思考・感情などを表現することも，心身の健康を維持するためには必要であるとの知見が存在する。例えば江口・濱口（2012，2015）は，適切な自己表現の在り方を「主張性」と定義し，主張性は自分の思考・感情などを表現することと相手の立場に配慮することの2側面から成り立つとした。このような自他を大切にしながら適切な自己表現を用いることのできる児童は，自尊感情が高いことが示されている（江口・濱口，2012，2015；山根・深見・石野，2016）。これらの知見から，適応方略として適切な自己表現を用いることのできる児童は，集団に適応していくことができると考えられる。

「非主張的な自己表現」を用いることの多い児童が，集団に適応するための方略として自己表現を用いることができるようになることは，心身の健康の観点から望ましいことといえる。自己表現を促進する要因としては，自尊感情が自己表現に正の関係を示し，自己表現も自尊感情に正の関係を示すという関係が明らかになっている（江口・濱口，2015）。

先行研究における課題

第一に、児童の自尊感情についての研究は数多くなされてきたが、児童の被受容感と自尊感情の関係については、明らかになっていない。

第二に、児童の被受容感について、その構造は未だ明らかになっていない。また、児童の被受容感には友人関係が強い影響を与えると考えられるため、特に友人関係に焦点を当てた被受容感尺度を作成する必要があると考えられる。

第三に、友人からの被受容感を獲得するための方略については、研究はほとんど行われていない。友人からの被受容感を獲得するための方略について研究を行うことは、児童が用いている友人関係に適応するための方法を理解することに寄与するものである。すなわち、被受容感を獲得するための方略を査定する尺度を作成することは重要であるといえる。

目 的

本研究の目的は、児童の被受容感の構造、被受容感を獲得するための方略、そしてそれらと自尊感情との関係性を検討することとする。研究仮説は以下のとおりである。
仮説 1 友人からの受容が児童の自己表現を促進する要因の一側面として認められる。
仮説 2 被受容感を獲得するために行っている方略は、友人からの被受容感および自尊感情と正の関係を示す。
仮説 3 被受容感は、自尊感情と正の関係を示す。

研究 1

目的

児童における自己表現の促進および阻害に関する経験や要因について検討することを目的とした。

方法

調査時期および調査協力者 2017年3月6日から3月22日にかけて、首都圏公立A小学校の5年生19名（男子8名、女子11名）に対し、調査を実施した。

手続き 調査における倫理事項を遵守しながら半構造化面接を行った。インタビューはハンディレコーダーを使って録音し、録音については調査協力者の同意を得た上で実施した。実施時間は1名につき10分程度であった。

調査内容 自分の気持ちや考えを相手に伝えることができるようになった経験についての回答を求めた。半構造化面接において、あらかじめ設定した質問の構成については、Table 1 に示したとおりである。

Table 1 インタビューガイドの概略

インタビューの内容	
1	学校において、自分の気持ちや考えを人に伝えられるようになった経験の有無
2	学校において、自分の気持ちや考えを人に伝えられるようになった経験の詳細
3	上記の経験において、自分の気持ちや考えを伝えられずにいた理由
4	上記の経験において、自分の気持ちや考えを伝えられたきっかけ
5	自己表現ができた後の感想

結果と考察

自己表現ができたきっかけにおいて、全部で4つの大カテゴリー、すなわち「他者からの受容」「克服」「納得」「モデリング」が得られた。カテゴリー分類の結果は Table 2 のとおりであった。

Table 2 自己表現ができたきっかけのカテゴリー分類結果

大カテゴリー	小カテゴリー	項目数	切片例
他者からの受容	受容の希求	2	自分の意見を出した方が、(友だちに)自分の出した意見が受け入れられるかもしれないと思って(意見を)出した
	親密性の希求	2	仲良くしたいから(自分の気持ちや考えを)言えた
	他者からの促し	6	算数の授業で、友だちと(お互いの考えを)見合っていて、「それ面白い考えだね」と言ってくれて、それで言えた
克服	開き直り	1	間違ってもいいやって思えてきて、それで(自分の気持ちや考えを)言えた
	自信あり	10	自信が付くと(自分の気持ちや考えを)言えるようになる
	恥ずかしさの克服	4	恥ずかしさもなくなったから、今は結構意見が言えている
納得	—	1	(無視が始まった理由を)聞いて「ああ、こういうことなんだな」って思った。それで謝って、仲良くできるようになった
モデリング	—	2	友だちが間違えても笑っていたので、そんな感じだったら僕にもできるかなって

次に自己表現ができずにいた理由において、全部で5つの大カテゴリー、すなわち「他者からの非受容」「勇気のなさ」「自信のなさ」「恥ずかしさ」「不安」が得られた。カテゴリー分類の結果は Table 3 のとおりであった。

Table 3 自己表現ができずにいた理由のカテゴリー分類結果

大カテゴリー	小カテゴリー	項目数	切片例
他者からの非受容	被害恐怖	6	ボールを取られたときに駄目だと言うことで、仲間はずれにされたり、虐められるのが怖い
	遠慮	1	(自分の気持ちや考えを)言ったら失礼な気がする
	親密でなくなることの恐れ	1	もっと仲良くできなくなると思って(自分の気持ちや考えを)言えなかった
勇気のなさ	—	2	2年生の頃は勇気がなかったため話せなかった
自信のなさ	—	2	それ(自信のある分野)以外だとあまり発言はしない
恥ずかしさ	—	6	間違っているのかなって思うと恥ずかしくて、(自分の気持ちや考えを)言えなくなっちゃう
不安	—	4	自分(の答え)が合ってるのかって

カテゴリー分類の結果、自己表現ができたきっかけと自己表現ができずにいた理由の両方に友人からの受容に関係する回答が存在することが確認された。回答の内容を踏まえると、友人から受容されることで自己表現ができるようになるという、正の関係性が存在する可能性が示唆されたといえよう。

研究 2

目的

友人からの被受容感を測定する予備尺度と、友人から受容されるために用いている方略を査定する予備尺度を構成することを目的とした。

方法

調査時期および調査協力者 2017年10月18日から11月16日にかけて、首都圏公立A小学校の5,6年生173名(男子90名,女子83名)に対し、調査を実施した。

手続き 調査協力校に質問紙を持参し、5,6学年の各3クラス,全6クラスの児童を対象に、倫理事項を遵守しながらクラスごとに調査を実施した。調査は無記名個別自記入方式の質問紙を集団実施方式で行った。

質問紙の構成

1. **フェイスシート** 学年と性別について記入を求めた。

2. **友人から受容されていると感じる場面についての自由記述** 友人から受容されていると感じた場面の具体例についての回答を求めた。「あなたが友だちから「大切にされている」「受け入れられている」と感じるのは、どんなときですか」という質問に、自由記述で回答を求めた。

3. **友人から受容してもらうための方略についての自由記述** 児童が友人から受容されるために用いてきた方略についての回答を求めた。「あなたは友だちから「大切な存在だと思ってもらう」「受け入れてもらう」ため、これまで具体的にどのようなことをしたり、心がけたりしてきましたか」という質問に、自由記述で回答を求めた。

結果と考察

友人から受容されていると感じる場面として、[時間の共有][相手の積極性][特別な友人関係][サポート][肯定的反応]の小カテゴリーからなる「被受容感」の大カテゴリーが得られた。カテゴリー分類の結果を参考に、各小カテゴリーから4項目ずつ、合計20項目からなる、友人からの被受容感予備尺度項目を抽出した。

また、友人から受容してもらうための方略において「自己開示的方略」、[他者理解][道徳的行動][サポート]の小カテゴリーからなる「愛他的方略」、[親友関係形成方略]、[積極的接触][派手な振る舞い]の小カテゴリーからなる「積極的な振る舞い」、[控えめな振る舞い][事なかれ主義]の小カテゴリーからなる「消極的な振る舞い」の5つの大カテゴリーが得られた。分類結果を参考に、各大カテゴリーから4項目ずつ合計20項目からなる、友人からの被受容感獲得方略予備尺度項目を抽出した。

研究 3

目的

友人からの被受容感、友人からの被受容感獲得方略および自尊感情のそれぞれを測定する尺度について、構造と信頼性を検討した上で、尺度間の関連性を明らかにすることを目的とした。

方法

調査時期および調査協力者 2017年12月5日から12月19日にかけて、首都圏公立

A および B 小学校の 5, 6 年生 295 名（男子 154 名, 女子 141 名）を対象に, 調査を実施した。

手続き 調査協力校に質問紙を持参し, 5 学年 5 クラス, 6 学年 5 クラス, 全 10 クラスの児童を対象に, 倫理事項を遵守しながら調査を実施した。調査は無記名個別自記入方式の質問紙を集団実施方式で行った。

質問紙の構成

1. **フェイスシート** 学年と性別について記入を求めた。

2. **友人からの被受容感予備尺度** 予備調査で作成した友人からの被受容感予備尺度を使用し, 児童が普段友人からどの程度受け入れられていると感じているのかについて 4 件法で尋ねた。

3. **友人からの被受容感獲得方略予備尺度** 予備調査で作成した友人からの被受容感獲得方略予備尺度を使用し, 児童がこれまでどのような方略を用いて友人から受容されようとしてきたかについて 4 件法で尋ねた。

4. **自尊感情尺度** 須崎・只井 (2013) によって検討された, 児童生徒の自尊感情を測定するための尺度 (1 因子 8 項目 4 件法) を使用した (項目例「わたし (ぼく) は, 自分のことを積極的に認めている」)。信頼性 (内的整合性) は高く, 児童生徒の自尊感情に対する教師評定との相関分析から妥当性が確認されている (須崎・只井, 2013)。

結果と考察

友人からの被受容感予備尺度の構造および信頼性の検討

友人からの被受容感予備尺度について, 項目分析で採用された 18 項目に対して主成分分析を行った。その結果, 第 1 主成分の主成分負荷量は .56 から .79 を示すなど, 尺度は単次元からなることが確認された。なお, Cronbach の α 係数は .94 であり, 十分な信頼性 (内的整合性) をもつことが確認された。よって, 被受容感予備尺度 18 項目を, 友人からの被受容感尺度 (以下, 被受容感尺度) として採用した。各項目の主成分負荷量を Table 4 に示す。

Table 4 被受容感尺度の主成分分析結果

項目	主成分負荷量
12 私が困っているときは, 友だちが助けてくれる	.79
11 友だちは私を仲間に入れてくれている	.77
10 協力して一緒に活動をする友だちがいる	.77
4 落ち込んでいると, 友だちが心配をしてくれる	.74
1 「一緒に遊ぼう」とさそってくれる友だちがいる	.74
17 相談に乗ってくれる友だちがいる	.73
6 友だちが困っているとき, 私を頼りにしてくれる	.71
9 友だちは私のことをほめてくれる	.70
20 友だちは私のしたこと (スポーツやイラストなど) を見て, 「うまいね」と言ってくれる	.70
18 友だちからあいさつをしてくれる	.69
16 友だちは私の話をまじめに聞いてくれる	.69
14 私が一人でいると, 友だちの方から声をかけてくれる	.69
8 友だちは私とけんかをして仲直りをしてくれる	.69
5 友だちは私の言ったことに賛成してくれる	.69
13 友だちと話していると, 「話が合うな」と思う	.66
7 友だちが私にいやなことを言った後には, 「ごめんね」と言ってくれる	.65
3 休み時間には友だちと一緒に遊ぶ	.65
2 私のことを親友と言ってくれる友だちがいる	.56

友人からの被受容感獲得方略予備尺度の構造および信頼性の検討

友人からの被受容感獲得方略予備尺度 20 項目について、最尤法・プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、最終的に 3 因子 17 項目が得られた。

第 1 因子は「自分の気持ちを友だちに伝えるようにしてきた (.77)」「自分の意見を友だちにはっきりと伝えるようにしてきた (.69)」など、友人から受容されるために、自分についての情報を開示する方略を表す項目が、高い負荷量を示した。そのため「自己開示方略」と命名した。

第 2 因子は「いつでも友だちの気持ちを考えて行動するように心がけてきた (.75)」「何があっても、みんなにいやな思いをさせないようにしてきた (.71)」など、友人に気を遣い、適応的な行動をとる方略を表す項目が、高い負荷量を示した。そのため、「愛他的方略」と命名した。

第 3 因子は「特別に仲の良い友だちをつくるようにしてきた (.74)」「いつも一緒にいるメンバーとは、特別に仲良くするようにしてきた (.71)」など、特別に仲の良い友人関係を形成する方略を表す項目が、高い負荷量を示した。そのため「親友関係形成方略」と命名した。以上の結果を Table 5 に示す。

各下位尺度得点について Cronbach の α 係数を算出した結果、「自己開示方略」が .79、「愛他的方略」が .73、「親友関係形成方略」が .65 であった。これらの結果から被受容感獲得方略予備尺度は心理尺度として一定水準以上の信頼性をもつことが確認された。よって被受容感獲得方略予備尺度の 17 項目を、友人からの被受容感獲得方略尺度（以下、被受容感獲得方略尺度と略）として採用した。

Table 5 被受容感獲得方略尺度の因子分析結果

	I	II	III
第1因子 自己開示方略			
6 自分の気持ちを友だちに伝えるようにしてきた	.77	-.06	.02
20 自分の意見を友だちにはっきりと伝えるようにしてきた	.69	-.06	.02
7 自分の秘密を、仲の良い友だちに伝えるようにしてきた	.57	-.07	.07
1 自分の得意なことや苦手なことを友だちに伝えるようにしてきた	.53	.11	-.02
14 私の考えを友だちに分かってもらうようにしてきた	.53	.23	-.00
8 私の方から友だちに話しかけるようにしてきた	.52	.11	.07
11 私が得意なことを友だちに見てもらおうとしてきた	.43	-.04	.28
第2因子 愛他的方略			
19 いつでも友だちの気持ちを考えて行動するように心がけてきた	.03	.75	-.05
2 何があっても、みんなにいやな思いをさせないようにしてきた	.03	.71	-.10
15 みんなに同じくらい優しくすることを心がけてきた	.12	.64	-.06
13 自分を優先しないで、いつでも友だちを優先するようにしてきた	-.07	.62	.09
17 困っている人がいたら、絶対に助けてあげるようにしてきた	.21	.51	-.08
4 友だちに好かれることよりも、嫌われないことを心がけてきた	-.19	.45	.33
18 友だちとちがうことはしないように心がけてきた	-.15	.39	.33
第3因子 親友関係形成方略			
10 特別に仲の良い友だちをつくるようにしてきた	.02	-.06	.74
5 いつも一緒にいるメンバーとは、特別に仲良くするようにしてきた	.07	-.08	.71
12 自分と好きなものが同じ友だちとよく話すようにしてきた	.22	.08	.37
因子間相関			
I	—	.52	.30
II	—	—	.23
III	—	—	—

各尺度の性差の検討

1. 被受容感尺度の性差 友人からの被受容感について性差の検討を行うために、被受容感尺度の得点について t 検定を行った。その結果、女子の方が男子よりも、有意に友人からの被受容感が高いことが明らかになった ($t(291)=2.84, p<.01$)。以上の結果を Table 6 に示す。

Table 6 被受容感尺度の性差

男子 ($n=152$)		女子 ($n=141$)		t 値
M	SD	M	SD	
59.23	8.61	62.06	8.44	2.84**

** $p<.01$

2. 被受容感獲得方略尺度の性差 友人からの被受容感獲得方略について性差の検討を行うために、友人からの被受容感獲得方略の各下位尺度得点について t 検定を行った。その結果、女子の方が男子よりも有意に愛他的方略の得点が高かった ($t(291)=3.74, p<.001$)。また、自己開示方略 ($t(291)=1.26, n.s.$)、親友関係形成方略 ($t(291)=0.29, n.s.$) については、それぞれ有意な性差が見られなかった。以上の結果を Table 7 ~ Table 9 に示す。

Table 7 愛他的方略の性差

男子 ($n=152$)		女子 ($n=141$)		t 値
M	SD	M	SD	
20.19	3.66	21.63	2.92	3.74***

*** $p<.001$

Table 8 自己開示方略の性差

男子 ($n=152$)		女子 ($n=141$)		t 値
M	SD	M	SD	
21.37	3.75	21.91	3.56	1.26

Table 9 親友関係形成方略の性差

男子 ($n=152$)		女子 ($n=141$)		t 値
M	SD	M	SD	
8.46	2.12	8.53	2.12	0.29

3. 自尊感情尺度の性差 自尊感情について性差の検討を行うために、自尊感情尺度の得点について t 検定を行った。その結果、自尊感情に有意な性差は見られなかった ($t(291)=1.58, n.s.$)。以上の結果を Table 10 に示す。

Table 10 自尊感情の性差

男子 ($n=152$)		女子 ($n=141$)		t 値
M	SD	M	SD	
21.65	4.19	20.86	4.42	1.58

各尺度間のパス解析モデル

「友人からの被受容感獲得方略は友人からの被受容感および自尊感情に正の関連を示し、友人からの被受容感は自尊感情に正の関連を示す」という仮説モデルを作成した。この仮説モデルを検討するために、共分散構造分析によるパス解析を行った。その結果、Figure 1のようなモデルが得られた。

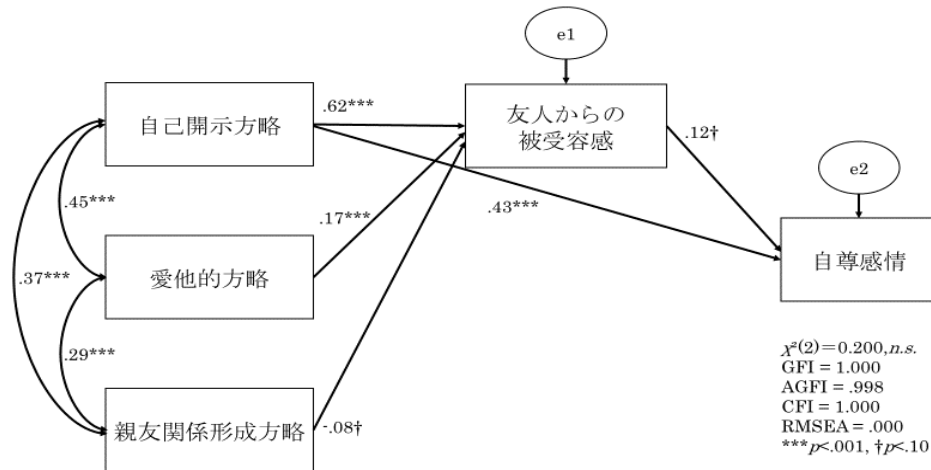


Figure 1 被受容感獲得方略と友人からの被受容感と自尊感情との関連に関するモデル

モデルのパス係数 (β) は、まず「自己開示方略」から「友人からの被受容感」へ有意な正のパスが確認された ($\beta = .62, p < .001$)。「愛他的方略」から「友人からの被受容感」へ有意な正のパスが確認された ($\beta = .17, p < .001$)。「親友関係形成方略」から「友人からの被受容感」へ有意傾向の負のパスが確認された ($\beta = -.08, p < .10$)。

また、「自己開示方略」から「自尊感情」へ有意な正のパスが確認された ($\beta = .43, p < .001$)。「友人からの被受容感」から「自尊感情」へ有意傾向の正のパスが確認された ($\beta = .12, p < .10$)。

「愛他的方略」から「自尊感情」への有意なパスは確認されなかった。「親友関係形成方略」から「自尊感情」への有意なパスは確認されなかった。

モデルの適合度について検討を行ったところ、適合度指標はそれぞれ $\chi^2(2) = 0.200, (n.s.)$, GFI = 1.000, AGFI = .998, CFI = 1.000, RMSEA = .000 であり、モデルはデータに十分に適合していることが示された。

得られたパスについて、まず「自己開示方略」から「友人からの被受容感」へ正の関係が示された。友人から受容されるために、友人に対して自己開示を行う方略を用いることは、友人からの被受容感を獲得することにつながるものと考えられる。さらに「自己開示方略」から「自尊感情」へ正の関係が示された。友人に対して自己開示を行う方略を用いることは、自尊感情が高まることにつながるものと考えられる。

次に「愛他的方略」から「友人からの被受容感」へ正の関係が示された。友人から受容されるために、周りの友人に気を遣い、優しく接する方略を用いることは、友人からの被受容感を獲得することにつながるものと考えられる。この結果は、過剰適応における他者志向的な適応方略が学校適応と正の関係を示すという知見(石津・安保, 2008)を支持するものと考えられた。

続いて「親友関係形成方略」から「友人からの被受容感」へ有意傾向の負の関係性が見られた。すなわち、特別に仲の良い友人をつくらうとする方略は、友人からの被

受容感に結びつかない可能性が示唆されたといえる。

最後に「友人からの被受容感」から「自尊感情」へ有意傾向の正の関係性が見られた。この結果から、友人からの被受容感を得ることは、自尊感情を高めることにつながると考えられる。また、本研究の結果からは、自尊感情に関係するのが友人からの被受容感のみではないという可能性が示唆された。黒川他（2006）は、学級集団に適応するためには、仲間集団以外の学級成員との関わりが重要な要因になると報告している。自尊感情についても同様のことが考えられるのではなかろうか。本研究においては、友人からの被受容感について尋ねた。そのため、友人として仲間集団の成員が想起されたことが推測される。しかし、学級集団においては親しい友人関係を築いている者、すなわち仲間集団の児童以外の学級成員が存在する。そして、親しい友人以外の学級成員からの被受容感もまた、自尊感情に関係すると考えられる。すなわち、自尊感情は仲間集団以外の学級成員を含めた児童からの被受容感を反映した感情であると考えられる。

各尺度間のパス解析モデルの性差

多母集団同時分析を用いて、パスの大きさの性差について検討を行った。その結果、男子においては Figure 2、女子においては Figure 3 のようなモデルが得られた。

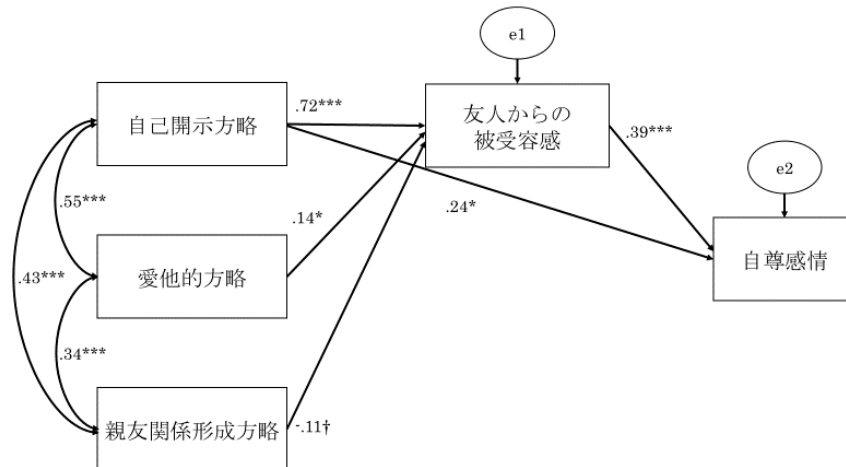


Figure 2 男子における被受容感獲得方略と友人からの被受容感と自尊感情との関連に関するモデル

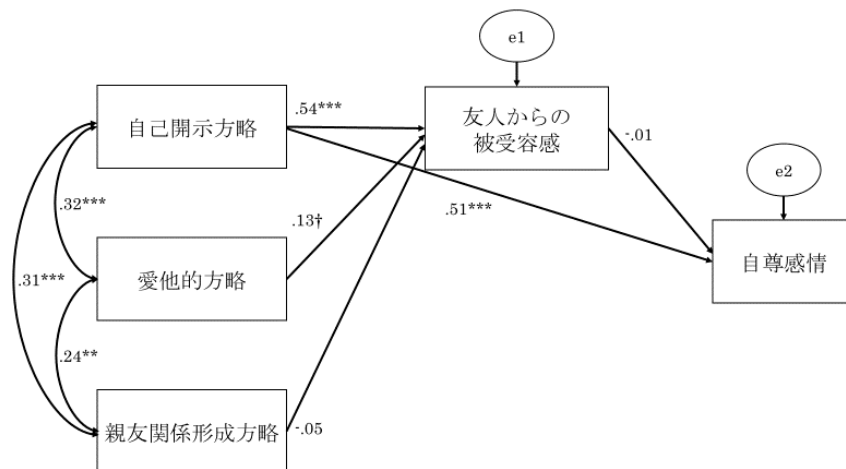


Figure 3 女子における被受容感獲得方略と友人からの被受容感と自尊感情との関連に関するモデル

男子におけるモデルのパス係数 (β) は、まず「自己開示方略」から「友人からの被受容感」へ有意な正のパスが確認された ($\beta = .72, p < .001$)。「愛他的方略」から「友人からの被受容感」へ有意な正のパスが確認された ($\beta = .14, p < .05$)。「親友関係形成方略」から「友人からの被受容感」へ有意傾向の負のパスが確認された ($\beta = -.11, p < .10$)。

また、「自己開示方略」から「自尊感情」へ有意な正のパスが確認された ($\beta = .24, p < .05$)。「友人からの被受容感」から「自尊感情」へ有意な正のパスが確認された ($\beta = .39, p < .001$)。

続いて女子におけるモデルのパス係数 (β) は、まず「自己開示方略」から「友人からの被受容感」へ有意な正のパスが確認された ($\beta = .54, p < .001$)。「愛他的方略」から「友人からの被受容感」へ有意傾向の正のパスが確認された ($\beta = .13, p < .10$)。「親友関係形成方略」から「友人からの被受容感」へのパスは有意と認められなかった。

また、「自己開示方略」から「自尊感情」へ有意な正のパスが確認された ($\beta = .51, p < .001$)。「友人からの被受容感」から「自尊感情」へのパスは有意と認められなかった。

なお、パス係数の大きさに性差が見られるか検討した結果、「友人からの被受容感」から「自尊感情」へのパス係数は女子より男子の方が大きかった ($p < .05$)。「自己開示方略」から「自尊感情」へのパス係数は男子より女子の方が大きかった ($p < .05$)。

「友人からの被受容感」から「自尊感情」へのパスについて、男子では有意なパスが見られたが、女子では有意なパスが見られなかった。児童の友人関係の性差について、親友関係を形成する程度は女子の方が高いとの報告 (朝日・青木, 2010; 三島, 2008; 須藤, 2003, 2008) がある。また、男子の友人関係が小集団化するのには女子よりもやや遅く、男子は女子よりも広い友人関係を形成している (井上, 1992) とされる。これらの知見から、本研究の研究協力者である小学校 5, 6 年生の男子は、女子に比べて友人関係が小集団化されておらず、幅広い交友関係をもっているため、友人からの被受容感が自尊感情に正の関係を示したと考えられる。

次に「自己開示方略」から「自尊感情」へのパスについて、女子の「自己開示方略」から「自尊感情」への正の関係は、男子の「自己開示方略」から「自尊感情」への正の関係よりも強いことが示された。「自己開示方略」を用いることは男女ともに自尊感情につながるが、その程度は女子の方が強いことが考えられる。本研究において女子の方が「愛他的方略」を用いることが多いという結果が見られたことや、黒川他 (2006) の知見から、女子は友人関係について男子以上に気を遣っていると推察される。そのような状況の中で「自己開示方略」を用いることができていると知覚することは、それ自体が自尊感情を高めることにつながると推察される。

友人からの被受容感獲得方略の群ごとの被受容感および自尊感情の差異

1. クラスタの特徴

被受容感獲得方略尺度の各下位尺度 (「自己開示方略」「愛他的方略」「親友関係形成方略」) の標準得点に基づき平方ユークリッド距離を算出し、Ward 法によるクラスタ分析を行った。デンドログラムを参考に 3 クラスタと 5 クラスタを検討した。検討の結果、クラスタ数と解釈可能性、得られた各群の重要性を考慮し、5 クラスタが最も適切であると判断された。そのため以下では 5 クラスタを用いて分析を行う。なお、各クラスタの人数は、第 1 クラスタから第 5 クラスタまで順に 81 名、97 名、65 名、42 名、8 名の回答者が含まれていた。

各クラスタの特徴を明らかにするため、5 クラスタを独立変数、被受容感獲得方略尺度の各下位尺度（「自己開示方略」「愛他的方略」「親友関係形成方略」）を従属変数とした Kruskal-Wallis の検定を行った。その結果、「自己開示方略」（ $H=190.43, df=4, p<.001$ ）、「愛他的方略」（ $H=209.26, df=4, p<.001$ ）、「親友関係形成方略」（ $H=40.10, df=4, p<.001$ ）について有意差が見られた。

「自己開示方略」についてペアごとの比較を行ったところ、クラスタ 4 はクラスタ 1, クラスタ 2, クラスタ 5 よりも有意に「自己開示方略」の得点が高かった ($p<.001$)。クラスタ 3 はクラスタ 1, クラスタ 2, クラスタ 5 よりも有意に「自己開示方略」の得点が高かった ($p<.001$)。クラスタ 1 はクラスタ 5 よりも有意に「自己開示方略」の得点が高かった ($p<.01$)。また、クラスタ 1 はクラスタ 2 よりも有意に「自己開示方略」の得点が高い傾向が見られた ($p<.10$)。

続いて「愛他的方略」についてペアごとの比較を行ったところ、クラスタ 4 はクラスタ 1, クラスタ 2, クラスタ 3, クラスタ 5 よりも有意に「愛他的方略」の得点が高かった ($p<.001$)。クラスタ 3 はクラスタ 1, クラスタ 5 よりも有意に「愛他的方略」の得点が高かった ($p<.001$)。クラスタ 2 はクラスタ 1, クラスタ 5 よりも有意に「愛他的方略」の得点が高かった ($p<.001$)。

続いて「親友関係形成方略」についてペアごとの比較を行ったところ、クラスタ 4 はクラスタ 1, クラスタ 5 よりも有意に「親友関係形成方略」の得点が高かった ($p<.001$)。また、クラスタ 4 はクラスタ 2 よりも有意に「親友関係形成方略」の得点が高い傾向が見られた ($p<.10$)。クラスタ 3 はクラスタ 1, クラスタ 5 よりも有意に「親友関係形成方略」の得点が高かった ($p<.01$)。クラスタ 2 はクラスタ 1 ($p<.05$)、クラスタ 5 ($p<.01$) よりも有意に「親友関係形成方略」の得点が高かった。

各クラスタの「自己開示方略」「愛他的方略」「親友関係形成方略」の得点を Figure 4 に示す。

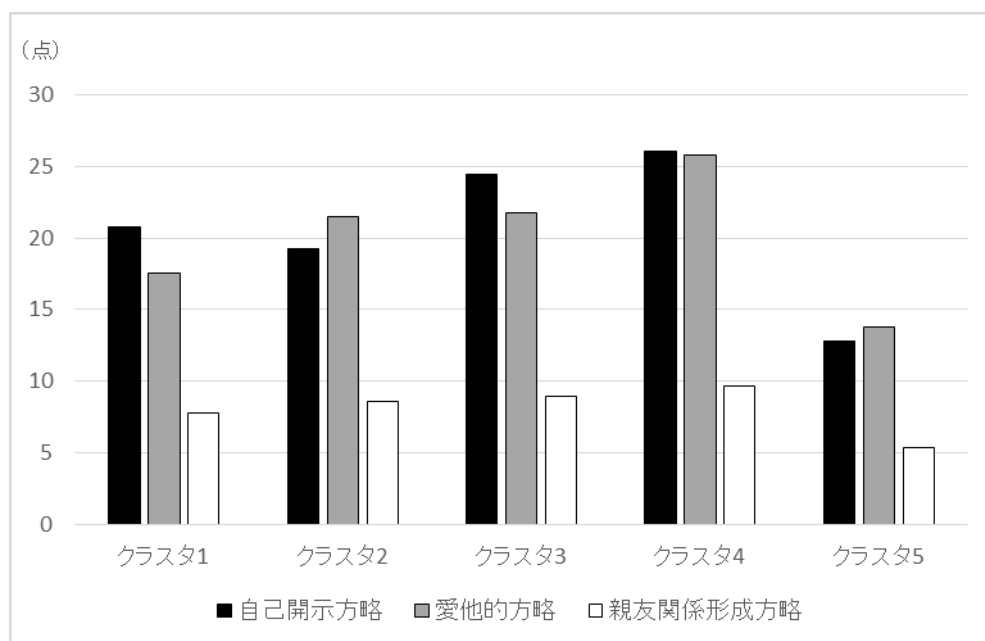


Figure 4 各クラスタの被受容感獲得方略尺度の得点

各クラスタの特徴から、クラスタ 1 を「全般的中群」、クラスタ 2 を「愛他的・親友関係形成方略群」、クラスタ 3 を「自己開示・親友関係形成方略群」、クラスタ 4 を「全般的の高群」、クラスタ 5 を「全般的の低群」とした。

2. 友人からの被受容感獲得方略のタイプごとの友人からの被受容感

友人からの被受容感獲得方略のタイプと友人からの被受容感の関係について検討するため、5クラスタを独立変数、友人からの被受容感を従属変数とした Kruskal-Wallis の検定を行った。その結果、群間に有意な差が確認された ($H=99.76$, $df=4$, $p<.001$)。

ペアごとの比較を行ったところ、「全般的高群」は「全般的中群」「愛他的・親友関係形成方略群」「全般的低群」よりも友人からの被受容感の得点が有意に高かった ($p<.001$)。また、「自己開示・親友関係形成方略群」は「全般的中群」「愛他的・親友関係形成方略群」「全般的低群」よりも友人からの被受容感の得点が有意に高かった ($p<.001$)。また、「全般的中群」および「愛他的・親友関係形成方略群」は「全般的低群」よりも有意に友人からの被受容感が高い傾向が示された ($p<.10$)。

各クラスタの記述統計量を Table 11 に示す。

Table 11 各クラスタの友人からの被受容感の記述統計量

クラスタ	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	ペアごとの比較
全般的中群	81	57.90	8.82	
愛他的・親友関係形成方略群	97	58.08	6.69	全般的中群>全般的低群† 愛他的・親友関係形成方略群>全般的低群†
自己開示・親友関係形成方略群	65	65.89	5.00	自己開示・親友関係形成方略群>全般的中群*** 自己開示・親友関係形成方略群>愛他的・親友関係形成方略群*** 自己開示・親友関係形成方略群>全般的低群***
全般的高群	42	67.10	4.03	全般的高群>全般的中群*** 全般的高群>愛他的・親友関係形成方略群*** 全般的高群>全般的低群***
全般的低群	8	41.13	12.71	

† $p<.10$ *** $p<.001$

「全般的高群」は、被受容感を獲得するための方略を用いる程度が高いクラスタである。「全般的高群」の友人からの被受容感が「全般的中群」「愛他的・親友関係形成方略群」「全般的低群」よりも高かったことは、「全般的高群」の被受容感獲得方略が有効に機能していることを示唆するものである。すなわち、友人からの被受容感獲得方略を全般的に適切に用いている頻度が他のクラスタより高いために、「全般的高群」の友人からの被受容感が高いと考えられる。

また「自己開示・親友関係形成方略群」の友人からの被受容感が「全般的高群」と同程度に高いことから、「愛他的方略」を用いる頻度が少ない場合にも、友人に対して自己開示を行う方略と、特別に仲の良い友人関係を形成しようとする方略を組み合わせ用いる場合には、同程度の友人からの被受容感を得ることが出来ることが示唆された。

「愛他的・親友関係形成方略群」の友人からの被受容感については、「全般的高群」および「自己開示・親友関係形成方略群」よりも低く、「全般的低群」よりは高い傾向にあることが示された。すなわち、「愛他的・親友関係形成方略群」においては、「愛他的方略」の不適應的な側面が顕在化している可能性があるといえよう。すなわち、親しい友人との関係に気を遣い、適應的であろうとすることが、友人からの被受容感に結びついていない児童の存在を示唆されたといえる。

3. 友人からの被受容感獲得方略のタイプごとの自尊感情

被受容感を獲得するために用いている方略と自尊感情の関係について検討するため、

5 クラスタを独立変数, 自尊感情を従属変数とした Kruskal-Wallis の検定を行った。その結果, 群間に有意な差が確認された ($H=50.46, df=4, p<.001$)。

ペアごとの比較を行ったところ, 「全般的の高群」は「全般的の中群」「愛他的・親友関係形成方略群」「全般的低群」よりも自尊感情の得点が有意に高かった ($p<.001$)。「自己開示・親友関係形成方略群」は「全般的の中群」($p<.05$), 「愛他的・親友関係形成方略群」($p<.001$), 「全般的低群」($p<.01$) よりも自尊感情の得点が有意に高かった。各クラスタの記述統計量を Table 12 に示す。

Table 12 各クラスタの自尊感情の記述統計量

クラスタ	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	ペアごとの比較
全般的の中群	81	20.95	3.93	
愛他的・親友関係形成方略群	97	19.75	3.68	
自己開示・親友関係形成方略群	65	22.60	3.99	自己開示・親友関係形成方略群>全般的の中群* 自己開示・親友関係形成方略群>愛他的・親友関係形成方略群*** 自己開示・親友関係形成方略群>全般的低群** 全般的の高群>全般的の中群*** 全般的の高群>愛他的・親友関係形成方略群*** 全般的の高群>全般的低群***
全般的の高群	42	24.38	4.07	
全般的低群	8	15.75	5.29	

* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

「全般的の高群」は, 「全般的の中群」「愛他的・親友関係形成方略群」「全般的低群」よりも自尊感情が高いことが示された。被受容感獲得方略を全般的に適切に用いることは, 友人からの被受容感につながるだけでなく, 自尊感情にもつながると考えられる。

また, 「自己開示・親友関係形成方略群」は「全般的の中群」, 「愛他的・親友関係形成方略群」, 「全般的低群」よりも自尊感情が高いことが示された。「愛他的方略」を用いる頻度が少ない場合にも, 友人に対して自己開示を行う方略と, 特別に仲の良い友人関係をつくろうとする方略を組み合わせる場合には, 友人からの被受容感だけでなく, 自尊感情も同程度に得ることが出来ると考えられる。

主な結果と今後の課題

本研究において明らかになった点は, 以下に示したとおりであった。

まず研究 1 において, 友人から受容されることが, 児童の自己表現を行う要因の側面であることが確認された。よって仮説 1 は支持された。

次に研究 2 において作成された友人からの被受容感尺度と被受容感獲得方略尺度を用いて, 仮説モデルの検討を行ったところ, 「自己開示方略」「愛他的方略」「親友関係形成方略」はそれぞれ, 友人からの被受容感に正の関係性を示した。ただし「親友関係形成方略」は, 男女ともに友人からの被受容感と有意な正の関係が見られなかった。よって仮説 2 は部分的に支持されたといえる。

続いて, 友人からの被受容感と自尊感情について, 男子においては有意な正の関係が示されたものの, 女子においては有意な関係が見られなかった。よって仮説 3 は部分的に支持された。この結果は, 女子の友人関係が排他性の高いものであることと関係していると考えられる。

本研究で得られたモデルからは, 友人からの被受容感と自尊感情の差異が推測される。すなわち, 自尊感情には仲間集団以外の学級成員を含めた他者からの被受容感を

反映した感情であるという側面があることが示唆された。このことは、Leary, et al.(1995)および Leary (2011) のソシオメーター理論や、児童期の自尊感情についての研究に重要な知見を提供するものであると考えられる。

また、クラスタ分析の結果を踏まえると、複数の被受容感を獲得するための方略を適切に用いることのできる児童は、友人からの被受容感を得られていると考えられる。この結果は、適切な自己表現である「主張性」が、自己の思考・感情を表現することと他者の立場に配慮し調和を保とうとするものの2側面からなる(江口・濱口, 2012)との知見を支持するものである。すなわち、「愛他的方略」を用いて他者の立場に配慮することに加え、「自己開示方略」を用いて自己の思考や感情を表現することが、友人からの被受容感を獲得するために有効であると考えられる。また、「親友関係形成方略」について、親友関係を形成するために愛他的に振る舞うことは、友人からの被受容感を得ることに寄与しない可能性がある。

最後に今後の課題は、以下の三点である。

第一に、友人からの被受容感尺度は全体的に得点が高く、標準偏差も小さい傾向にあった。今後は個人差をより反映できるツールの開発について検討する必要がある。

第二に、本研究において回答者が想起した「友人」の範囲が回答者によって異なっていた可能性がある。「特に親しい友人」や「クラスメイト」などの語を用いることで、想起する範囲を限定したうえで調査を実施すると、自尊感情と友人との被受容感の関係がより正確に検討できると考えられる。

第三に、友人からの被受容感獲得方略として親友関係形成方略のみを用いる場合、その方略が有効に機能しないことが考えられる。このことから、親友関係形成方略のみを用いて友人からの被受容感を獲得しようとするよりも、複数の方略を用いて被受容感を獲得することが有効であると推察される。すなわち、児童が用いることのできる方略を増やすような支援を考案、実施していくことが重要であると考えられる。

引用文献

- 阿部 美帆・今野 裕之 (2007). 状態自尊感情尺度の開発 パーソナリティ研究, 16, 36-46.
- 朝日 香栄・青木 紀久代 (2010). 思春期における友人関係の発達的变化の様相——親友関係 Chumship の形成度ならびにメンタルヘルスとの関連から—— カウンセリング研究, 43, 182-191.
- 江口 めぐみ・濱口 佳和 (2012). 他者配慮の観点を含めた児童の主張性と内的・外的適応との関連 心理学研究, 83, 141-147.
- 江口 めぐみ・濱口 佳和 (2015). 主張性と児童の内的・外的適応との因果関係——短期縦断的検討—— 心理学研究, 86, 191-199.
- 長谷川 真里 (2014). 他者の多様性への寛容——児童と青年における集団からの排除についての判断—— 教育心理学研究, 62, 13-23.
- 保坂 亨 (1998). 児童期・思春期の発達 下山 晴彦(編)教育心理学Ⅱ 発達と臨床援助の心理学 (pp.103-123) 東京大学出版会
- 井上 健治(1992). 人との関係の広がり 木下 芳子(編)対人関係と社会性の発達(新・児童心理学講座 8) (pp.3-28) 金子書房
- 石津 憲一郎・安保 英勇 (2008). 中学生の過剰適応傾向が学校適応感とストレス反応に与える影響 教育心理学研究, 56, 23-31.
- 石津 憲一郎・安保 英勇 (2013). 中学生の学校ストレスへの脆弱性——過剰適応と感情への評価の視点から—— 心理学研究, 84, 130-137.

- 伊藤 美奈子 (1991). 青年期自我形成過程における自己受容研究の意義と視点 青年心理学研究, 3, 20-28.
- 黒川 雅幸・三島 浩路・吉田 俊和 (2006). 仲間集団から内在化される集団境界の評価 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), 53, 21-28.
- Leary, M. R. (2011). Sociometer Theory. In Van Lange, P. A. M, Kruglanski, A.W, & Higgins, E.T(ed.) *Handbook of Theories of Social Psychology* (33rd ed., pp.141-159), SAGE Publications.
- Leary, M. R., Tambor, E. S., Terdal, S. T., & Downs, D. L.(1995). Self-esteem as an interpersonal monitor: The sociometer hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 68, 518-530.
- 松本 恵美 (2016). 児童期と青年期における友人関係研究の概観と展望 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 65, 135-145.
- 三島 浩路 (2003). 親しい友人間にみられる小学生の「いじめ」に関する研究 社会心理学研究, 19, 41-50.
- 三島 浩路 (2008). 小学校高学年で親しい友人から受けた「いじめ」の長期的な影響——高校生を対象にした調査結果から—— 実験社会心理学研究, 47, 91-104.
- 中間 玲子 (2016). 「自尊感情」とは何か 中間 玲子 (編) 自尊感情の心理学——理解を深める「取扱説明書」—— (pp.10-34) 金子書房
- 荻野 佳代子 (2012). 小・中・高校生における自己概念の発達Ⅱ——自尊感情育成における他者との関係に焦点をあてて—— 神奈川大学心理・教育研究論集, 32, 37-42.
- 岡田 涼 (2008). 親密な友人関係の形成・維持過程の動機づけモデルの構築 教育心理学研究, 56, 575-588.
- 岡田 努 (2007). 大学生における友人関係の類型と, 適応及び自己の諸側面の発達の関連について パーソナリティ研究, 15, 135-148.
- 岡田 努 (2011). 現代青年の友人関係と自尊感情の関連について パーソナリティ研究, 20, 11-20.
- 桜井 茂男 (2000). ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版の検討 筑波大学発達臨床心理学研究, 12, 65-71.
- 須藤 春佳 (2003). 前青年期の「chumship 体験」に関する研究——自己感覚との関連を中心に—— 心理臨床学研究, 20, 546-556.
- 杉山 崇 (2002). 抑うつにおける「被受容感」の効果とそのモデル化の研究 心理臨床学研究, 19, 589-597.
- Sullivan, H. S. (1953). *Conceptions of modern psychiatry*. New York : Norton. (サリバン, H.S. 中井 久夫・山口 隆 (訳) (1976). 現代精神医学の概念 みすず書房)
- 須崎 康臣・兄井 彰 (2013). 小学生と中学生を対象にした Rosenberg における自尊感情尺度の妥当性, 信頼性及び因子構造の検討 生活体験学習研究, 13, 93-98.
- 白倉 瞳・濱口 佳和 (2015). 小学校高学年および中学生における対象別評価懸念と適応との関連 教育心理学研究, 63, 85-101.
- 山根 由梨・深見 俊崇・石野 陽子 (2016). 児童のアサーションと自尊感情との関連 島根大学教育臨床総合研究, 15, 107-121.
- 山崎 勝之 (2017). 自尊感情革命——なぜ, 学校や社会は「自尊感情」がそんなに好きなのか?—— 福村出版